十三回忌追善 特別演奏会

森下元康メモリアル・オーケストラ2022

―― 夢・憧れ・祈り、そして新たな地平へ ――

2022年5月5日（木・祝）14:00開演（13:20開場）
ライフポートとよはし コンサートホール

※入場無料
要・入場整理券
全席自由席

〈曲目〉

ベートーヴェン：交響曲第３番 変ホ長調『英雄』
シベリウス：交響詩『フィンランディア』
アルビノーニ：『アダージョ』ト短調（ジャゾット編曲）
エリック・コロン：『Passacaglia』 In Memoriam Motoyasu Morishita（委嘱作品）

〈指 揮〉

現田 茂夫（神奈川フィルハーモニー管弦楽団 名誉指揮者）

〈コンサートマスター〉

三浦 章宏（東京フィルハーモニー交響楽団 コンサートマスター）

入場整理券は、以下からお求めください

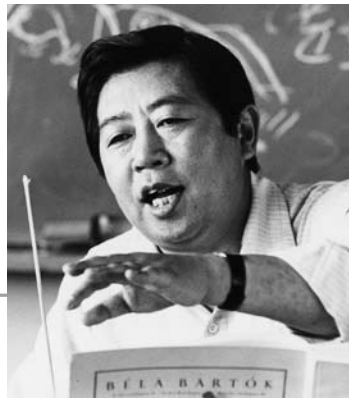
① （公財）豊橋文化振興財団
（穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 内）
② ライフポートとよはし総合案内所
③ 豊橋市民文化会館
④ 公式ホームページからWeb予約
（http:// mmmorche. xsrv. jp）

新型コロナウィルスの感染拡大防止対策をとって開催いたします。ご来場の皆様のご協力をお願いいたします。
※マスクを着用していない方、未就学児のご入場は、お断りいたします。

Motoyasu Morishita Memorial Orchestra 2022

主催：『森下元康メモリアル・オーケストラ 2022』実行委員会　　共催：公益財団法人 豊橋文化振興財団、豊橋交響楽団
協力：公益社団法人 日本アマチュアオーケストラ連盟（JAO）、トヨタ青少年オーケストラキャンプ（TYOC）同窓会、
認定NPO法人 世界アマチュアオーケストラ連盟（NPO－WFAO）

十三回忌にもまた、全国から大勢の仲間たちが森下先生に会いに来てくれます。



森下元康先生の事蹟

（故）森下元康先生は 2010 年（平成 22 年） 5 月 23 日に他界され、本年は十三回忌を迎えます。森下元康先生の活動歴は、国語教師として 1961 年（昭和 36 年）に赴任した豊橋市立羽田中学校に器楽合奏クラブを創設することからすべてが始まります。それは数台のハーモニカと、蛇腹に穴の開いたアコーディオン２台からのスタートでした。クラブの OB を母体として 1965 年（昭和 40 年）に『豊橋リードフィルハーモニー交響楽団』を設立し、10 年後にはヴァイオリン・ヴィオラを導入した『豊橋交響楽団』として再出発するなど、足かけ 45 年の歳月をかけて郷土の市民オーケストラに育て上げました。

その間、1971 年（昭和 46 年）に挙行した『東京公演』の際に全国のアマチュアオーケストラに声をかけたことを契機に、1972 年（昭和 47 年）には『日本アマチュアオーケストラ連盟（JAO）』を設立。《音の泉の広がりを》をモットーに掲げ、国内アマチュアオーケストラの交流・発展を強力に牽引（けんいん）し続けました。また、JAO の事業として『トヨタ青少年オーケストラキャンプ（TYOC）』を 1985 年（昭和 60 年）より主宰するなど、将来の地域文化活動を支える青少年たちに夢と理想を語り続けてきました。そして音のネットワークは世界にまで広がり、1998 年（平成 10 年）に結成された『世界アマチュアオーケストラ連盟（WFAO）』は、現在も波濤（はとう）を越えて精力的な活動を展開するなど、森下元康先生の蒔かれた種は日本で、そして世界で着実にその芽を伸ばし続けています。

ふたたび問われる、「いまなぜ森下元康なのか」

森下元康先生が物故されて既に 12 年が経（た）とうとしていますが、その人柄を懐かしむ声は今もあとを絶ちません。

《 ほんの小さな、ほんのささやかな、ほんとに未熟な音楽と人にも幸あれかし。》

この一文は昭和 45 年、34 歳の森下先生が『東京公演』の準備に奔走する中で綴られたもので、激しい葛藤の末に昇華された夢や憧れが、痛切な祈りとして響いてきます。地方都市のアコーディオンを主体とした市民オーケストラが東京での公演を挙行したことは、当時の時代背景では前代未聞の大事件であり、青年教師は世間の猛烈な反対と揶揄（やゆ）の中に翻弄（ほんろう）されます。しかしそんな中であっても、これほどの静謐（せいひつ）さと堅固な意志に貫かれた一文を綴ることができたのは、果てしない自問自答の中に自身を信じ、そして仲間たちを心から信頼し、共に進もうとしていたからではなかったでしょうか。

森下先生の活動の源泉、それはいつも “ 集いの空間 ” の中にあったのではないかと、いま改めて思い至ります。

その後の活動の大きな分水嶺（ぶんすいれい）となった『東京公演』の実現に向けて共に奔走した T さんは、森下先生と過ごす時間についてこんな文章を記しています。

《 どうも森下先生の周囲に生活していると、時間と空間が膨張して、一般の日常生活のペースでは考えられない事が、常識化してしまうのです。これは共に活動してみた人なら誰にもわかるのですが、日頃心のすみに押しやられている蛮勇みたいなものとか、何かに対するはっきりとした拒否とか、夢のまた夢として扱われないロマンとかが、いきなりクローズアップされ、「こんな子供っぽいことを言ってよい世界が現実にあるんだなぁ」と驚いてしまいます。結局、出来そうにもない事が何とか格好がついていくのは、こうした森下先生を中心とする我々の雰囲気にあることは間違いありません。》

ここには “ 森下先生がいる空間 ” が見事に描写されています。幸福感とか充足感とか誇らしい義務感とか責任感とかいった、計算機では計算しつくせないあの “ 生き甲斐 ” とよばれる心の主食を、ふんだんに供給されていた空間。そして私たちはこの空間で過ごす居心地の良さを、いつでもそこにある当たり前の日常と錯覚したまま、ある日突然、森下先生の永き不在を迎えることになりました。

十三回忌にもまた、全国から大勢の仲間たちが森下先生に会いに来てくれます。懐かしむためにではなく、もう一歩前へ進むため、その向こう側の風景を見るために……。きっと誰もがそんな想いで集まってくれるのだと思います。

あの日からずっと、心のすみに押しやられ続けていたなにものかが、もしここに集うことでふたたび動き出すことができたとしたら、それはきっと “ 新たな地平 ” への第一歩となることを固く信じ、ここに追善の会を開催するものです。

ふたたび問われる、「いまなぜ森下元康なのか」と……。

どうか耳をすまして聴いてください。この、世界にたったひとつのオーケストラから聴こえるかすかな祈りの中に、その答えはきっと見つけられるはずですから。

十三回忌追善『森下元康メモリアル・オーケストラ 2022』実行委員会